

地域再生計画(案)

- 1 地域再生計画の申請主体の名称
香川県小豆郡内海町
- 2 地域再生計画の名称
小豆島内海町オリーブワールド推進計画
- 3 地域再生計画の取組を進めようとする期間
平成16年度～平成20年度
- 4 地域再生計画の意義及び目標

(1) 地域経済の問題点・課題

本町の産業については、平成12年の国勢調査による就業人口比率で見ると、第1次産業3.7%、第2次産業が41.1%、第3次産業が55.2%と他地域に比べ第1次産業の比率が低く、第2次産業の比率が高いという特徴がある。これは、200年の歴史を持つ醤油や戦後この醤油を使い飛躍的に発展した佃煮、また、素麺の製造などの食品製造業が盛んであり、これら第2次産業への就業者が多かったことと、平坦地が狭小で耕作地が少ないことが第1次産業への就業人口の低い原因であると考えられる。

製造業としてのオリーブ加工品(食品、化粧品等)については、オリーブの有効性がテレビ等に取り上げられ、需要が高まったこともあり、産業として確立の兆しを見せている。

本町では、構造改革特区の認定を受け、会社組織によるオリーブの栽培から加工、販売ができる基盤ができたため、今後は栽培の拡大と加工施設の整備を行ったうえで、収穫から搾油までの時間を短縮することにより、鮮度を高め、日持ちがする商品の製造を目指したい。また、低農薬であり、実を丹念に一粒ごとにとるという外国産との収穫方法の差によって、高いレベルの品質を持つ小豆島ブランドの製品を確立し、輸入品との差別化を図る必要がある。

小豆島の観光業については、観光客数は、昭和40年代の後半に新幹線が岡山まで開通したことや島内に相次いで観光施設ができたこともあり、昭和48年には154万人というピークを迎えている。その後オイルショックなどによる低迷があったが、昭和63年の瀬戸大橋の開通や新たな観光施設の整備も進み、平成元年には138万6千人まで回復した。しかし、その後は経済情勢も影響して漸減状況にあり、特に宿泊数は、平成元年の81万4千人から平成13年には37万7千人と半分以下に減少しており、宿泊施設の閉鎖も相次ぎ、観光産業の衰退が顕著となった。しかし、近年、国際情勢による海外旅行の自粛や新たな宿泊施設の整備などにより、宿泊者数も平成14年には39万3千人、平成15年には43万8千人と回復の兆しが見えている。

(2) 今後の方向性

ア 食品製造業の持続的発展へ

既存の醤油、佃煮、素麺、オリーブ製品、ゴマ油等の製造業については、輸送コストの低減、産業廃棄物の処理等について、行政としての政策を立案し、早急に対応することにより振興を促す。

オリーブ製品については、小豆島ブランドを立ち上げるためには栽培面積を増やし、収穫量の増産が是非とも必要である。オリーブの栽培は収穫期が短期間であり労働集約が必

要であるため、建設業からの就業者の移動や定年退職者の雇用を進めるとともに、グリーンツーリズムの一環としての収穫体験などにより対応する必要がある。更に将来的には外国人労働者(研修生)の活用も検討する必要がある。

食品製造も海外での製造が今後の流れになると思われるが、日本人の消費の2極化である付加価値の高い製品は「いい物は高くても売れ、いい物というイメージが売れる。」ことから、観光産業とリンクさせ、原材料や製造工程を実際に見せ、それを使った料理を実際に食べてもらうといった体験型の観光の中で、そのものの新鮮さ、素朴さ、作り手の顔が見える商品として売り出していく。

イ 観光業の振興

観光産業はこれに関わる産業の範囲が広く、土産物、飲食、宿泊を始め、交通、地場産業である製造業、農業、小売業など多岐にわたり、総合産業とも称される。

また、観光により自分達の地域の魅力を多くの人たちに見て、知ってもらうことは、郷土愛に繋がり、その魅力あるものが地域のアイデンティティとなる。

これまでの観光地は、「簡便で刹那な楽しみを求める観光客」と「直接的で素早い収益効果を期待する観光事業者」との安易な一致による観光地づくりが多い。この妥協ともいえる安易な一致が、質を劣化させ、魅力のない観光地づくりに拍車をかけている。

これからの小豆島の観光におけるマーケットは、中国をはじめとしたアジアにも求める必要があり、観光客の満足度合いをさらに高めるためにも、「国際的に通用する標準的な質」を備えることが必要だ。しかし、これまでの観光客と事業者の妥協から抜け出さない限り、質の向上はありえない。そのためには、地域のあらゆる要素を素材にした、地域独自の物語づくりが必須要件である。

それとともに、日本人が観光に求めるものが大きく変わってきている。日常からの非日常へと変わる旅には、今まで自分が出会ったことのない新しいものの発見や体験、新しい知識に巡り会うことに喜びを感じるようになってきている。それに加え、旅先での人との出会いにも旅の魅力を見いだす傾向にある。

これとは別に、あくまでも心身の安息、リフレッシュを求める旅があり、ゆっくりとした時間の流れの中に身を置き、豊かな自然と美しいロケーションの中で時を過ごすことへのステータスは非常に高い。

これらの観光ニーズの変化に対応していくためには、小豆島を中・長期滞在型及びリピーターが訪れる観光地とし、滞在の間、各種の体験(オリーブ収穫、加工、醤油の製造、農業、釣りなど)ができ、ゆっくりとした観光地巡り(八十八ヶ所霊場巡り、ウォーキング、小豆島循環バスを利用した観光地巡りなど)ができるような体制を整える必要がある。

(3) 地域再生計画の意義及び目標

今回の地域再生計画は、オリーブという他地域にない資源を活用して農業、製造業、観光業の分野において地域経済の活性化につなげていくための具体策である。

オリーブは、温暖な地中海式気候の本町にあって、明治41年に当時の農商務省がオリーブ油の自給を図るために、香川、三重、鹿児島県の3県で試作したが、その中で唯一、本町の西村地区で植栽されたものが根付き、明治43年に初めての収穫がなされた。その後、栽培方法や病害虫の駆除、製品加工の技術などたゆまぬ努力により栽培が進んだが、昭和34年の輸入自由化により外国産の低廉なオリーブ油や製品が輸入されるようになってからは、栽培面積も4分の1程度に減少していた。

しかし、近年、オリーブの持つ健康への有用性やグルメ志向により、オリーブへの関心が高まりを見せてきた。また、国連旗には平和と実りのシンボルであるオリーブの枝が地球を包み込むように描かれている。そして、丘陵地に広がるオリーブは、その小さくて可憐な花びらや銀白色の葉裏が、絵画の素材として古くから著名な画家をひきつけている。

このような魅力を持つオリーブを観光業に生かそうと、本町においては、平成2年にオリーブ栽培発祥の地である県立のオリーブ圃場に隣接して小豆島オリーブ公園を整備し、第三セクター(財)内海町オリーブ公園振興公社を立ち上げ、管理、運営にあたっている。

この施設は、小豆島のシンボルであるオリーブを軸に、同じく地中海を原産とするハーブ園の整備によりエーゲ海のイメージを作り、総合管理棟や簡易宿泊施設、ハーブクラフト館などの建物はギリシャ風とし、オリーブが持つ魅力と日本に居ながらにして南欧や地中海を旅する疑似体験と相まって小豆島観光の大きな柱となっている。

オリーブワールド推進計画は、この公園を中心に地域全般にわたり、今まで自分が出会ったことのない新しいものの発見や体験、新しい知識に巡り会うことに喜びを感じたり、旅先での人との出会いやゆっくりとした時間の流れの中に身を置き、豊かな自然と美しいロケーションの中で時を過ごすという新しい観光ニーズに対応できるように、既存施設のリニューアルや新しい施設の整備、ソフト事業の展開を行っていかうとするものである。

計画全体のフロー図(別紙1)

(4) 具体的な事業

ア ビジターハウスの整備

郷土文化保存伝習施設(民俗資料館)【定住促進対策事業により整備】をオリーブワールドゾーンのポータルとして、訪れる人にオリーブワールドの楽しみ方を紹介するとともに、オリーブに関する展示と情報提供を行う。加えて、オリーブ公園内の各種施設を利用して、この地を芸術・文化の実践の場及び発表の場とするために、年間を通して演劇、音楽会、各種講演会や絵画教室、絵画コンテスト、フォトコンテストなどの芸術・文化事業の企画立案及び実施を行うとともに、芸術・文化情報の収集及び提供をするための組織を作り、住民の参加を得ながら活動を進めていく拠点とする。

また、小豆島全体の観光案内ができ、観光情報の発信ができるビジターハウスとして有効活用する。

ビジターハウスの概念図(別紙2)

イ アクセスの整備

ビジターハウスにおいて、オリーブワールドゾーンに滞在できる時間別の各種体験を取り入れたコースを紹介し、そのコースに応じた統一したビジュアルサインや外国語版案内板を設置し、訪れた方が心良く体験観光ができるように取り組んでいく。また、散策コースや絵画や写真の対象となるビューポイントの整備に伴う案内板の設置を行う。

ビジュアル計画の概念図(別紙3)

5 地域再生計画の実施が地域に及ぼす経済的社会的効果

(1) 小豆島観光の振興

これからの地域社会を活力あるものとしていくためには、住民がその地域が持つ素材を生かし、魅力ある生活空間を作り上げるとともに、その空間が他の人にとっても魅力あるものと感じられることで交流人口が増え、交流人口が増えることによりさらに地域に誇り

を見いだしていけるという循環が大事になってくると思われる。

本町においては、オリーブにより小豆島のイメージを大きくアップさせ、他に誇れる島の姿や産業を持つことがこのことにつながると考えられる。また、あと4～5年で退職期を迎える団塊の世代にとっても、新しい人生のステージを故郷で暮らすというライフスタイルを選択してもらうためには、オリーブの島のイメージは好材料であると思われる。

経済的な効果としては、オリーブを核とした地域振興は、芸術や文化と結合させることにより、地域のイメージをよくするとともに、滞在型、体験型の新たな観光ニーズを充足させるものとして、小豆島を訪れる観光客の増加につながることが期待できる。

総合産業といわれる観光業はその振興が他産業に及ぼす影響が大きく、特に中長期滞在型観光客の増加を期待するこの計画を実施することにより、宿泊客数の増加を見込んでいる。内海町においては、そのような客層をターゲットにしたホテル等が整備されてきており、平成15年度における宿泊者数が9万3千人であるのに対し、平成20年には、年間11万3千人の観光宿泊者を目指したい。これによる経済効果としては、年間4億円程度が期待できる。

(2) オリーブ産業の振興

オリーブを有力な地場産業として育成していこうとしている本町にとって、栽培から加工、販売を民間企業が一貫して行えるオリーブ振興特区の恩恵は大きく、徐々に民間企業のオリーブ産業への進出が増えている。しかしながら、使用期間の短い搾油機器への設備投資については、躊躇する企業が多数であった。今回の計画において実施するオリーブファクトリー（オリーブの搾油、共同加工工場）の整備によって、平成20年に町内で収穫が見込まれる140トンのオリーブが搾油され、食用オイルや化粧品等に加工販売されると約2億円程度の経済効果が期待できる。

6 講じようとする支援措置の番号及び名称

10402 公共施設を転用する事業へのリニューアル債の措置

13004 補助対象施設の有効活用

230007 案内標識に関するガイドラインの策定

7 構造改革特区の規制の特例措置により実施する取組その他の関連する事業

(1) 「オリーブアカデミー」の設立

オリーブに関する文化・芸術・情報の発信機関とする。

ア 地域文化リーダーの育成、芸術文化団体の育成、シンポジウムの開催等による発信、交流を通じた芸術文化活動の活性化を図る。

イ 「東京芸術大学交流事業美術ワークショップイン小豆島」を継続する。

ウ 絵画の町としてのビューポイント等の整備、作品コンテストの開催などを行う。

エ グリーンツーリズムの推進、民間や研究機関との交流、連携によってオリーブに関するデータベースづくりを行う。

オ ワークショップやセミナーを開催する。

カ 内海湾芸術文化村協会を設立する。

オリーブアカデミーの具体例（別紙4・5）

(2) オリーブファクトリーの整備

構造改革特区に認定され、企業がオリーブ栽培に参入している。しかし、町内にオリーブを搾油する施設がないため、他地域で搾油し、自社で加工する方法を取っている。また、個人農家であってもオリーブの栽培が徐々に増加してきており、これを製品にするための加工場が必要となってきた。そのため、製造業としてのオリーブ産業の確立を目指し、オリーブ搾油工場を建設する。

観光施設であるオリーブ公園にあつては、オリーブに関するあらゆる情報を蓄積する必要があるとともに、オリーブを収穫し、オリーブから油をとるといふ他地域では経験できない場を設けることにより、グリーンツーリズム、アグリツーリズムにつながる観光ニーズに対応できる施設としてオリーブ搾油工場の建設を必要としている。

(3) ゾーニングの明確化

内海町は他に誇れる魅力ある地域資源として「オリーブ」、「醤油」、「二十四の瞳」3つのゾーンに区分され、それぞれが魅力あるエリアとして地域と一体となって観光交流空間を形成している。オリーブゾーンの整備と合わせて、他のゾーンの再生を図る。

ア「醤油」…醬の郷整備事業

200年を越える歴史を持つ本町の地場産業である醤油製造業は、そこから派生した佃煮製造業とともに本町の基幹産業として町の経済を支えてきた。工場の近代化は進んでいるが、町のアイデンティティとして酵母菌によって黒く変色した瓦屋根と焼き杉板の塀を持ち、もろみ桶が並ぶ醤油蔵は企業努力により残され、国の登録有形文化財にも指定されており、産業観光の地として街並み整備や道路整備が今後必要とされている。

イ「二十四の瞳映画村」…あのころの小豆島館整備事業

本町出身の作家である壺井栄の名作「二十四の瞳」は昭和29年、木下恵介監督、高峰秀子主演で映画化され、空前の大ヒット作となり、これにより小豆島の観光は飛躍的な発展をした。その後、昭和62年に朝間義隆監督、田中裕子主演で再映画化された。このときのオープンセットを活用して、昭和初期の日本の姿を再現し、「二十四の瞳」が持つ人間愛と平和の尊さ、そして何よりも先生と子供の心のつながりを後世に伝える施設として「二十四の瞳映画村」を整備した。この施設についても、第三セクターである(財)岬の分教場保存会によって運営されている。

この施設には、昭和初期の農家や漁家、商家といった建物があつり、オリーブ公園の地域にあつた郷土文化保存伝習施設(民俗資料館)で保存、展示されている資料を当時の姿で展示できるので、その資料の移転を行いたい。また、この施設も平和という共通のキーワードを持ったオリーブワールド構想の一翼を担う施設であり、保存資料の展示や交流のための新たな施設整備を行いたい。

(4) オリーブビーチの活用

プレジャーボートの係留施設の整備などにより、本町の観光シーズである「オリーブ」、「醤油」、「二十四の瞳」のそれぞれの地域を小型船で結ぶ航路を検討する。

8 その他の地域再生計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項 特になし

別紙

- 1 支援措置の番号及び名称 10402 公共施設を転用する事業へのリニューアル債の措置
- 2 当該支援措置を受けようとする者 香川県小豆郡内海町
- 3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

本町の西村水木地区において、昭和61年、62年度の2カ年をかけて農林水産省所管の農村地域定住促進対策事業により整備した民俗・歴史資料を展示している郷土文化保存伝習施設（鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積651.6㎡）について、本町が推進しているオリーブによる農業、地場産業、観光業の振興の一環であるオリーブワールド推進計画に基づき、地域資源活用促進といった喫緊の課題を実施するための用途変更を行うにあたり、地域活性化事業債を活用しようとするものである。

本町には、古くからの観光地であり奇岩景勝で名高い寒懸溪や新しくオリーブや醤油という地域の素材や映画化された名作を生かした数多くの観光地を有しているが、本町を訪れた人を案内する施設やその魅力を情報発信する機能を持った施設を有していなかった。

変更後の施設は、町の観光振興機関の配置などにより、本町の魅力を十分に情報提供できる場とするとともに、県のオリーブ圃場と町が整備した公園を併せた小豆島オリーブ公園の玄関口となるビジターハウスとするものであり、このゾーンでの楽しみ方や体験も含めたコース設定を紹介できる場とする。また、オリーブに関する資料や情報を展示する施設とし、他では接することの少ないオリーブという素材を紹介する施設としたい。取組は、平成16年度、17年度の2年間を予定している。

別紙

1 支援措置の番号及び名称 13004 補助対象施設の有効活用

2 当該支援措置を受けようとする者 香川県小豆郡内海町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

本町の西村水木地区において、昭和61年、62年度の2カ年をかけて農林水産省所管の農村地域定住促進対策事業により整備した民俗・歴史資料を展示している郷土文化保存伝習施設（鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積651.6㎡）については、開館当初は郷土の文化である石材業のための道具、農機具、漁具、昭和初期を偲ばせる家具等の展示と本町の歴史に深く関わる資料の展示により、地元住民の見学はもとより、観光客の入場もあり年間1万人を越える入場者があったが、その後、各地に同様の施設ができることにより観光客入場者が減少するとともに、地元住民の入場も減り入場者は開館当初の半分以下となってきている。企画展などの入場者を増やす試みは行っているものの、その需要は著しく減少しており、施設の有する郷土文化の伝習機能を十分に発揮できていない状況である。そこで、農業振興策でもあり本町が推進しているオリーブによる農業、地場産業、観光業の振興の一環であるオリーブワールド推進計画に基づき、用途変更を行おうとするものである。

本町には、古くからの観光地であり奇岩景勝で名高い寒懸溪や新しくオリーブや醤油という地域の素材や映画化された名作を生かした数多くの観光地を有しているが、本町を訪れた人を案内する施設やその魅力を情報発信する機能を持った施設を有していなかった。

変更後の施設は、町の観光振興機関の配置などにより、本町の魅力を十分に情報提供できる場とするとともに、県のオリーブ圃場と町が整備した公園を併せた小豆島オリーブ公園の玄関口となるビジターハウスとするものであり、このゾーンでの楽しみ方や体験も含めたコース設定を紹介できる場とする。また、オリーブに関する資料や情報を展示する施設とし、他では接することの少ないオリーブという素材を紹介する施設としたい。取組は、平成16年度、17年度の2年間を予定している。

別紙

1 支援措置の番号及び名称 230007 案内標識に関するガイドラインの策定

2 当該支援措置を受けようとする者 香川県小豆郡内海町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

小豆島オリーブ公園は、オリーブを核とした潤いと安らぎのある文化リゾートとして平成2年に管理棟であるオリーブ記念館とテニスコート、野外ステージ、ハーブガーデンなどが整備された。その後、簡易宿泊施設やクラフト館、ハーブ展示温室などが順次、整備され、平成14年には、県立の施設で温浴施設やレストラン、大ホールを備えた健康生きがい中核施設サン・オリーブが完成した。今後においては、これらの施設の有効に活用し、ソフト事業を展開することにより滞在型観光客を受け入れられるゾーンとしていく。そのためには、ビジターハウスにおいて、オリーブワールドゾーンで滞在できる時間別の各種体験を取り入れたコースを紹介し、国が策定する案内標識に関するガイドラインを活用して、これに沿った統一したビジュアルサインや外国語版案内板を整備する。また、散策コースや絵画や写真の対象となるビューポイントの整備に伴う案内板の設置を行う。